

南方（南洋諸島）

我が戦争体験記（その一）

—三カ月の教育召集

と瓦斯訓練—

岩手県 熊谷 音之進

昭和十七（一九四二）年十一月、私は巻網船団の漁船員として働いていた。船団は本船以下七隻で、船員は約五十人である。当時の漁場は、茨城県の水戸沖で、水揚げは主に那珂港で、漁場も豊かで毎日大漁の日々でしたが、夢想だにしなかった召集令状「赤紙」が突然届いた。

船長以下同僚船員一同の驚きも大変なもので、

今でもあの光景は忘れることができない。入隊日までの期日も余りなかったので、船長から早速帰郷の命を受け早々身支度を整える破目になった。

船には大漁旗を掲げ、船長以下船員全員の歓呼の声に送られ、那珂湊駅を後にしました。午後だった。車中、胸に去来するものは、将来に対する希望と不安でいっぱいだった。

夜中、一ノ関駅で大船渡線に乗り換えた時には一抹の不安も消え、故郷、両親をはじめ兄弟は勿論、親類一同と会えると思うと嬉しくて仕方なかった。大船渡線に乗り換え、間もなく眠りに就き、目が覚めると故郷大船渡の光景と朝日を車窓から目にした瞬間、この時程我が故郷の有り難さに感動したことはなかった。

小友駅で下車、足早に自宅へと急ぐ。自宅では両親等が帰宅を今か今かと待ちうけていた。国のためとはいえ、家では出征の準備をしていた。休む暇無く親戚、隣組、友人等に出征することになつたので「後をよろしく願います」と父親と一緒に挨拶廻りをする。

出征するまでの日が迫っていたためであった。自分と同様、地区内に召集令状が届いていた者は自分外に二人であった。

憂心愈々出征の日は晴れて門出には絶好の日和であったが両親の表情は曇り顔で、なんともやりきれない気持ちであった。どこの町や村でもそうであったように、召集者の送別は町村民挙げて首長が小学校等の公の施設で実施するのが通例であった。

今回は、自分の学んだ小学校の校庭で開催され、大勢の村民が集まった。我々出征兵士の氏名を書いたタスキを肩に掛けて三人が登壇し、村長から「我が帝国日本の隆盛のために^{じんすい}尽瘁されるよ

う」とお祝いとも激励とも受け止められる言葉をいただく。自分としては複雑な気持ちであった。

刻一刻と出発の時間が迫る中、出征兵士の代表が「吾が身をも省みず皇国日本、我が国のために一生懸命頑張る」ことを力強く述べ、式典は「万歳、万歳」で終了する。大船渡線小友駅まで三分位かかる道程を村長が先頭に、村民、愛国婦人会等沢山の人たちに送られて駅に着く。

列車が到着するまでの間、婦人会の人たちから既に用意していたお神酒を戴く。当時の神酒は「皇国のためには死しても辞さず」という風潮が強くあった。列車が到着する。乗り込むと同時に「万歳、万歳」の声の高鳴りと日の丸の旗の波の中、汽笛一声と共に出発する。何とも表現できない気持ちであった。特に両親の思いを思うと。しかし自分としては軍人の一員として胸を張って出征することは何よりの喜びであった。

東北線の一ノ関駅に到着するまでの各駅に停車

し、駅毎に愛国婦人会の方々からお神酒を戴いた。弘前駅に到着したのは夕方であった。

指定された旅館へ移動する。疲れを癒す暇もなく夕食を済ませ、幾つかの大部屋で出征兵士達が休憩し、待機する。十時頃一人の上官から、明日の入隊の心得について約一時間説明を受けた後就寝する。

翌朝早く、期待と不安を胸に起床、食事終了後は、昨夜指示、説明を受けた通りの行動となる。師団の広場に集合、一人一人点呼を受けると同時に隊の編成がなされる。同郷の朋友もこの時点でどここの隊に編入されたかは全く分からなくなった。

自分は元の第三十一連隊であった北部第十六部隊第二中隊第五班に配属された。中隊長は金野中尉であった。新兵教育は翌日からであった。起床ラップと同時に一日の軍隊生活が始まり、消灯ラップで一日の生活が終わるのであった。

鳴り響く起床ラップ。起床、寝具の整頓、班員

の整理、点呼を受ける。点呼の際、声が低いと何回でもやり直しを受ける。

点呼が終了すると共に乾布摩擦があった。十二月になると本土の北限、青森の寒さは想像以上の寒さとなる。その中の乾布摩擦は身に堪えるが終わると汗ばむ。意気軒昂、兵舎の部屋に帰ると寝具等の整理、整頓、悪いものは、全部木銃でひっくり返されている。驚いた。整理、整頓は教えるものではなく、覚えるものであることを知った。特に毛布は耳を揃え真四角に畳んで上げなくてはならなかった。それが終わると部屋の掃除が始まる。掃除の基本は雑巾掛けであった。馬穴に水を入れて置くと水が凍り手が悴む。これも辛い作業であった。

期待の朝食となる。入隊前に軍隊の食事は、一膳飯と教えられていたが真にそのとおりであった。当時、岩手県内の農漁村の食糧事情を考えると、実に捨てるには勿体無い事だと思った。入隊して、何がなんでも最初に覚えなくてはならないの

は、直属上官の官職と氏名であった。

自分のように記憶力の疎い者は、氏名と顔が一致せず苦労したことが思い出される。更に困難なことは「歩兵操典」の勉強であった。訓練科目が多く、時間は一秒たりとも余裕のない毎日である。前後するが「歩兵操典」とは旧陸軍において、歩兵の基礎的訓練や、連隊長以下の戦闘法についての原則が示されている「歩兵の基本」をなすものである。

そんな多忙の日々であっても「閑居」な場所があった。そこは便所であった。訓練中であっても便所へ行きたいと上官に話せば直ちに許可が出る。自分も我慢ができない状態になったので許可を得て便所に急いで行った。驚いた。満員であった。更に、便所の中から声が聞こえる。やっこのことで済ませ訓練に復するが、後で分かったのが我々のような新兵は時間が無いので「閑居」な場所、便所で勉強する以外に道がなかったのである。従って便所は常に満員であったし、自分もそ

うして勉強したことが辛い思い出であった。

一日の訓練が進む。訓練の項目は銃の手入れ、銃ナンバーの暗記、行進、停止間の敬礼等々である。銃は三八式歩兵銃であった。発砲訓練であるが、最初は空砲の撃ち方であった。その目的は弾の飛ぶ方角を理解することであった。

空砲発砲の訓練を始めてから数日位経った頃だと思うが、いよいよ実弾発射をすることになった。実弾を五発ずつ与えられ、五人が一組となつて横に並び寝射ちの姿勢を取るよう指示される。指揮官からの的を定められ、呼吸を一時止めて発射するよう指示を受ける。古参兵が一人ずつ後に立って動作を見ている。的は約三百メートルの距離の所にある。「撃て」の号令と共に撃った。

三発を射った後何の指示もなかったので残りの二発をすぐさま撃った。撃ち方終わりと立つと「ビンタ」を二つ喰らった。往復ビンタである。突然のことで驚いた。五人が全員終了していな

い。自分が終了したら良いということは許されないと注意される。連帯行動が重視されるのが軍隊であると知った。しかし話より先にビンタとはこれも教練の一方法であると理解する以外になかった。

標的の方向に「的中」を確認する兵がいて、的中か否かを旗で知らせってくる。自分の後にいた兵隊から自分の点数は四十八点だと知らされた。非常に良い点だと驚いた。

数日後、小隊長より事務室に来るように呼び出される。不安であった。呼びだされるような悪いことはしていないし、反対に誉め称えられるような事もしていない。意を決して事務室に向く。小隊長から「君は青年学校を卒業しているので師団教育を明日から受けるように」と命令される。

師団は九個中隊の他に歩兵砲、通信、瓦斯^{ガス}の十二の中隊で編成されていた。師団教育を受けるのは、各中隊より選抜された一〇二人であった。一

〇二人の学歴は大学・中等学校卒業者が殆ど、青年学校卒業者は自分以外一人で、一〇〇人が中等学校以上の高学歴者であった。

指揮官は、幹部候補生あがりの中尉で、吾々に与えられた任務は「瓦斯制毒」の教育訓練であった。最初に与えられた器具は「防毒面」であった。

全防は、飛行機からの瓦斯雨降りの場合に必要とされるし、催涙ガス、窒息性瓦斯、持久性瓦斯は「黄イビリットルイサイト」等々勉強にもなるが、訓練にはさすがに間断が無く厳しい。

あの雄大な霊峯「岩木山」の山麓で連日実戦さながらの演習、訓練の続く中で、夜間訓練も度々である。検知粉で敵の散毒（仮想）地の前延、後延の調査を常とする事、また瓦斯雨降りに依って被害を受け汚染された「物」は蒸気消毒する事も教わる。訓練の期間が短期間であったため筆舌に尽くせぬ猛訓練だった。

唯一の楽しみは、便所の次に煙草の配給であった。自分は班の煙草要給を受けとる係となる。配給を受けるには現金が必要であった。一時金で事務室に支払をしなければならなかったからである。入隊時に服装検査があり、必要以外の物、特に現金はすべて一時預かりとして取上げられる。自分は帽子の中に隠し持っていたので見付からずに済んだ。

事務室で煙草を受け取り班員に配給するが、時々幾らか余る時もある。これが役得として自分のものになる。

また、事務室には勤務の都合でと思うが時たま中隊長に会う時がある。ある日、中隊長に会うなり突如「事務室の片隅を君に与えるから勉強をしてくれ、他の中隊に負けたくないから」と檄を受ける。感激と同時に自分の不甲斐無さが理由と思うと無念であったが、この檄を機に自分の信念が確立され「天皇忠誠」へと大きく変化するのであった。

日曜日には、隊員の面会人等で賑わう。面会人の受付、案内等の仕事をするため各中隊毎に机を並べ、配布された名簿で面会人を確認し、案内する。自分の郷里は遠いためか残念ながら誰も来てくれなかったので、毎週のように案内役や受付の仕事をしていた。

ある時上官兵が「休んで外出して来い」と言われたのでしばらくぶりで許可を受けて外出する。特に目的はなかったが、前から映画を見たいと思っていたので「映画館」へと急いだ。映画館は大きい建物で二階建であった。二階から約三時間程楽しむ。映画の題名、内容は記憶から薄れたが「心」が落ち着き癒すことができた。

空腹感が過ぎる。娑婆の飯を食いたいという気持ちだが全体から湧き出る。自制とは関係無く足は食堂へと早まる。食堂に入った瞬間失敗したと思った。自分のような新米は殆どいない。上司ばかりであった。世の中にこんな旨いものがあるの

かと感嘆した。特に、日本酒は本当によかった。当然、適量以上に飲む。足元のふらつのが解かる。

時には、第九隊長を先頭に、各中隊、小隊に編成し行軍がある。我々第五班は、軽機関銃四丁、他は三八式歩兵銃を肩に背囊等で、個人の装備総重量は六貫（二十二・五キロ）を背負い、我々二人は隊長の側に付いた。更に全防の防毒面検知粉を身に付け三十二里（一二五キロ）行軍が続く。

一時間毎に若干の休憩時間がある。目的地に到着した時は陽は西に傾き夕方であった。入隊後初めての行軍であったためか、足に豆ができた。注意はしていたのだが、そのうちに豆ができた者は集合するよう連絡があった。集会地に集まった者は約五十人位だと記憶している。治療ははじまるが人数が人数だけに「荒治療」であった。

出発前から承知はしていたが、待望の野営である。幕舎の設営、はじめての飯盒炊飯、屋外の食事等々楽しい思い出となっている。入営前漁船で

見る夜空、星座は素晴らしかったが、今宵の星座は殊更美しく最高であった。故郷の情景、家族の事を想いながら消灯ラッパと共に幕舎内で就寝する。

けたたましい起床ラッパと同時に今日の訓練が始まる。朝食後は、帰隊の行軍であった。前日は、精神的な緊張感が強くあったが、帰りはお互いに気分的に楽であったためか、各中隊毎に軍歌を歌いながらの行軍であった。隊に着いたのは夕刻であった。無事演習を終了する。

ある日、週番士官の准尉から突然呼び出しを受ける。任務は、古兵一人を付けるから三人で「准尉」の家の掃除をしてくれないかと言われた。

自分達は、休みであったので了解する。准尉の家までの地図を手に出発する。略図のため度々聞きながらようやくして辿り着く。家には准尉の奥さんが一人いた。事前に承知していたかどうかは知らなかったので事情を話すと、奥さんから一服

してからと奨められたので一休みする。お茶、菓子、少々の酒が出された。天下ご免、早速御馳走になる。古兵の指示によってそれぞれ仕事を始める。

自分の仕事は空窓のガラス拭きであった。梯子をかけて登り拭き始めるが、時間と共に目眩が激しくなる。不思議であった。良く考えると一服の時の酒が原因であることに気付き作業途中にして降り、下の仕事をした。約一時間半で全部の仕事が完了し、奥さんから感謝の言葉を頂き准尉の自宅を辞する。

しかし帰隊するまでに時間があるので衆議一決「弘前公園」を見学することにする。ちょうど、桜の花が満開で、お濠の辺りは花見客で賑わっていた。最後に「弘前城」を見学した。実に見事な光景で吾を忘れ無我の胸中になり浮かれていた時、予想外の事件が起きた。憲兵に捕捉され尋問を受ける。

この時間になにしている。脱走して来たのか等

次々と問い詰められるが、古兵が事情を説明する。そして「許可証」を見せて了解を得た。閉門までは未だ時間があるので時間までに急いで帰隊するよう説諭を受ける。准尉に任務が終了し帰隊する旨報告すると共に夕食を取った。

歳月不人待、入隊して三カ月になんなんとしていた。訓練も佳境期にあった。瓦斯訓練も日毎に厳しくなった。ある日、密閉した兵舎内に催涙ガス三本を放射し、その中に防毒面を付けて入り、今まで訓練を受けた事を実際に行動する演習があった。室内に防毒面を付けた隊員が入る。指揮官から軍歌を歌いながら駆足で室内を廻れと命令される。

しばらくすると「防毒面」を取れの命令が出る。命令のとおり防毒面を外し「数秒」経つと第一に「首」の辺りがピリピリする。防毒面を装着する際には、必ず指を揃えて行うよう指導された。「防毒面を被れ」の指示が出る。呼吸が苦し

い。倒れる者もいる「生死の境をさまよう」とはこのことかと思つた。急いで防毒面を着ける。この訓練が、三カ月教育期間の最後であつた。夜九時頃同期の兵隊に新しい服が支給された。我々には支給されなかつた。

ここで三カ月の訓練がすべて終了したのでと知つた。服の支給が終わつた後、我々同期一同が講堂に集められ師団長より訓示を受けた。脳裡に鮮明に焼き付いているのは「国運の隆盛に君達の双肩にある、行け満州」であつた。師団教育を受け制毒班以外の者は、その夜のうちに夜汽車で青森を後にした。

我々制毒班は一時帰京になると言い渡される。そして制毒班の任務は「不幸にして露西亞（ソビエト）と戦争となつた場合に重要な任務になる」と話される。

永くて短かつた三カ月間、これで一人前の軍人かと思うと感慨深いものがある。日本国家のために、との意識が強くなつたことは事実であつた。

更に今、夜行列車で青森を後にした彼らの心境を思うとなんともやりきれない複雑な気持ちであつた。

命令により三カ月の訓練を終了し、生まれ故郷に帰郷することになる。

（三カ月間の教育召集は解除、生まれ故郷に帰る。しかし、その後は徴用か再召集か）

「故郷は遠くにいて思うもの」。太平洋上に日出る光景、新鮮な磯の香り、新鮮な海産物等を故郷で充分味わう日々であつたが、再度召集令状が来るのは確実であつたので、その間は「生命の洗濯」と思い気儘に過ごしていた。